

時事報

か漢城ニ入ルノ後遂ニ戰ニ及ブカ和ニ決スルカ其報知ノ東京ニ來ルハ早クテ本年末遅クテ來年早々ナルベシ當時事務報社ヨナハ在漢城特派通信員ヲ去ルト
八日朝鮮ヨリ歸國ノ井上角五郎君ニ在
金山通信員ヲ間利子八五郎君ニ在
ニ在馬關通信員ヲ鈴木千巻君ニ在
ニ各依頼シ井上鈴木ノ兩君ハ去廿二日ノ薩摩丸ニテ井上特派全權大使ト同船各其受持地ニ出發シ間利子君ハ既ニ釜山

ニ満在シテ通信二役事ノアリ又支那上海二八兼
テヨリ
特派通信員本多孫四郎君
ノ滯在スルアリテ別シテ今回ノ事變ニ注意レ居ルガ故ニ自
今當時事新報ノ朝鮮事變ニ關スル報道ハ其朝鮮ヨリスルト
支那ヨリスルトニ論ナク總ニ一層ノ迅速ト正確ト詳細トニ
加フベク奉存候間蓄ニ倍シ御高評アランコナ請フ

臣刺殺ノ騒動ニ始マリ即時政府ノ更迭アリ事大黨政權ヲ失ヒテ獨立黨朝ニ立ナ五日京城内無事國王陛下大闕ニ退御シ六日モ亦甚タ無事ナリシニ此夕ニ至リ京城駐在支那兵ノ司令官袁世凱ハ在留ノ支那人ニ命ヲ傳ヘテ城内ノ日本人ハ男女官商ノ別ナク一切コレヲ屠殺スベント催促シ同時ニ大兵ヲ率ヒテ大闕ノ東門ニ押寄セ先ツ外衛ノ朝鮮親軍ヲ擊破リテ次ニ内衛ノ我日本兵ヲ攻撃シタルヨリ忽テ京城ノ大亂ト

爲リ遂ニハ國王、皇后、皇太后以下王宮ヲ連れ出デ玉ヒテ支那兵ノ手ニ渡リ、大闕ハ支那兵ノ焼ク所ト爲リ、日本公使并ニ日本公使館ハ支那兵并ニ朝鮮兵ノ襲撃スル所ト爲リテ士卒數名コレニ死シ、城内ノ日本人ハ男女ノ別ナク二十餘名ノ多キ皆支那兵并ニ朝鮮兵ノ屠殺スル所ト爲リ、其住家什物ハ支那兵并ニ朝鮮兵ノ掠奪焚燒スル所ト爲リ、日本公使館并ニ日本兵營ハ其貯フル所ノ糧食被服ヲ掠奪セラル、ノ

ナリタリト雖ニ幸ニシテ日本人ノ勇武能ク彼等ガ一夫チモ
生還セシメシトノ兎謀ヲ挫キ一應仁川ニマテ引揚クルヲ得
タルナリスル亂暴狼藉ハ我日本國ノ名譽上ニ權理上ニ利益
上ニコ決シテ黙許スベカラザルモノナルガ故ニ我政府ハ直ナ
ニ參議井上伯ナ特派全權大使ニ任シ急ニ京城ニ赴キ支那朝
鮮両國ニ向テ大ニ談判スル所アラシメタレハ此談判ノ結果

ハ數日ナ出ズシテ我輩コレヲ聞知スルナ得ルナルベシ
テ回ノ事變其主謀者其歎唆者其實創者タル者ハ京城駐任ノ
又那兵ナルガ故ニ我輩ハ此處分ノ第一着ニ三營ノ支那兵コ
ガ四時間ナ限リテ一人モ殘ラズ南陽ニ退去シ同所ヨリ軍艦
西船ニ搭シテ直ニ日本國ニ歸ルトナ命シ若シ船ナクシテ歸
ルニ道ナシト云ハ、好シ其兵器ナ取揚ケ軍服ヲ脱セシメ等
常平和ノ支那人ト爲リテ陸路ニ歸國セシメ跡ニ残リタル
兵器軍服ハ我軍艦ナ以テ早々北京政府ニ送リケ其戾リノ
何物ニハ此支那兵ノ不擇ナ謝スルタメ同政府ヨリ我レニ贈
ル所ノ二千萬圓ノ賞金ヲ取來ルモシトノ意見ナ述ベタリ是
シ甚ダ適當ノ處置ナリト信ズト雖ニ人ノ心ノ同シカラザル
義面ノ如クナルガ故ニ同シ我日本國人中ニテモ體分我輩ト

異説ノ人モアルベク隨テ今回特派大使ノ談判振リモ果シテ
何様ノ都合ニシテ何様ノ終結ニ歸スベキヤ固ヨリ我輩ノ知
ル所ニアラズ依テ今我輩ナシテ想像力ノアラン限り試ミコ
愛ニ平和談判ノ極點ナ齧カシムルモ世人ノ参考上又一裨益
ナキニアラザルベキカ

朝鮮事變

小生
抑セ太
ニ移ニ
館迄引
コ乏シ
モヘ勧

念至極

關係ス
ニ飯味

●麻生
○上海諸
邦に達し

致譽白端

事には別
悉知せざ
る舊黨な

もわるが
を知らし
上海メテ
——新聞

内又於て
よし」と

大きめ支那
政々たるこ

レンド

レン氏之
と殺せし
や」等の

清日報の
紙上はけ
す可うや

外思之錄

○朝鮮事變別報 今回朝鮮事變の頃末ハ先日の紙上に掲げ
さる「遭難記事」並に其筋へ達したる報告等にて既に詳なれ
共今又昨日到着の北支那日々新聞に汽船南陸號が朝鮮より
齎し來りたる報道ありとて掲載せるを見るゝ前の諸報と比
して彼此参考よ資く可き處もあれば重複の點の省きて茲に
其大要を記す

本月四日郵征局開業式の簡請待を受けて臨席しるる外國
人は米國公使フート氏英國領事アストン氏及び朝鮮雇用
逸人穆麟徳等なり尤日本ハ竹添公使ハ出席せモ又支那人
ハ一名も其席ニ在らざりき斯くて賓主歡を盡し十時頃に
ありし頃一人の異風の男が席上ニ出て來りて局外ニ出火
する由を告げたり此男は朝鮮人あるや日本人なるや詳あ
らざれ其身ニ朝鮮の服を着け居たり此時朝鮮の大臣閔
氏は之を聞きて坐中の人々を戒めて動搖せさらしめ我自
ら出でゝ事の仔細を糺さんと云ひリ、二名の武官を隨へ
く街上ニ出るや否や戸外ニ待居たる刺客の爲めに刺され
たり閔氏の傷は第一ニ左の耳第二ニ右の肩より腕へうけ
第三ニ脊に長さ十四英寸程第四ニ右肩第五ニ左腕に長さ
五英寸程第六ニ左手の裏第七ニ左足の脛都合七箇所あり
閔氏は研られあがふ遠て、局内に入らんとする時程氏は
右の物音を聞付け何事やらんと立出る機ニハタと閔氏が
逃入るに出遇ひ閔氏は程氏の來るを見て其腕に取付さる
儘物とも云はず其場に倒れたり此間先に閔氏に隨ひ戸
外ふ出る二名の武官中一名は閔氏を救はんとて刺客と
戰ひ右手ニ傷を負ひたるを見て刺客は直ニ逃げ去りたり
程氏は閔氏ニ抱き付かれて満身血に染みあがら閔氏を介
抱して局内ニ入り直ニ手當を爲せしが此怪にて局内ニ
集り居たる衆客は皆難を恐れ先を争て其家ニ移し醫師アーレン氏を招きて治療を請ひしはアーレン氏ニ直様來り
て治療と施セり閔氏の傷は重傷に相違あけれ其生命に
ハ別條なかるべしと云へり(アーレン氏は近頃迄上海ふ
居ざる人ニテ此時京城の米國公使館に近傍ニ住し居たり
と云ふ)佑閔氏が程氏の家に在る間ニ朝鮮の軍務卿某見
舞に來り五日の午前四時頃迄程氏の家に在りしが此時國
王より王宮に出頭すべき有ありしかば某は命を奉して直
ニ參内し國王に謁見ハ後國王の居室を出て、次の間ニ至
りたる折柄向者にか擊殺され之に續きて此夜半中に六人
の大臣悉く殺されたり云々(記者白す此より以下新政府
組織の事より竹添公使が仁川に引揚くる迄の事を述べた
其前日來の報道と大同小異あれば略す)

●遂ニ守ルベカラサルヲ察シ後退ク云々とある一節

スルノ真氣ナキヲ覺ユルナリ實ニ今回朝鮮事變ノ落着如何
ハ世界ノ國交際上我大日本國ノ地位ノ進退ニ大關係アリ國
チ思ヒ身ナ思フノ心アル者輕々コレヲ看過ヲア博フルト
勿レ